



講演② 「住吉と舞踊の伝統」

大阪大学大学院 人文学研究科
演劇学研究室 中尾薫



はじめに

【前提】住吉を踊る舞踊とは？

①住吉を題材にして踊るもの（遊興の意味が強い）

→仕舞・上方舞・かっぽれ

②住吉の神のために踊るもの（神事芸能として）

→田楽、住吉踊

〈なぜ、住吉はこんなに多くの芸能や踊りの題材となるのか？〉

1.名所としての住吉：歌詞に詠まれる住吉の地のイメージ、歌枕

1.名所としての住吉



日本のデジタル文学地図



「住吉 / Suminoe, Sumiyoshi」の情報

基本情報

地誌・歴史

和歌・漢詩・俳諧 (65)

物語・説話・絵図等 (17)

謡曲 (0)



- **地誌情報 (日本語):**
現在の大阪市住吉区の一帯。かつては住吉神社のすぐ近くまで海があったとされる。「すみのえ」「すみよし」の表記・訓については様々な解釈や説が出されているが、「古事記伝」の「**住吉を須美与志と唱るは、後世のことにて那良のころまでは、須美能延とのみ云り**」という記述以来、地名の発生としては「すみのえ」が古く、墨江・清江・住吉など種々の字があてられたが、しだいに住吉の表記が一般化し、平安時代になると「すみよし」と読むことになった、とされる。しかし、この通説はすべてに適用することはできない。中古・中世の古訓では「住吉」は文字どおりに「すみよし」と訓読されることが多い。

『日本のデジタル文学地図』参照 (<https://literarymaps.nijl.ac.jp/#!/app/spots>)

住吉の文学的イメージ

- 歴史 (日本語) :

古くから、海辺のイメージで捉えられてきた。また、住吉の神は当初、航海安全の神・軍神として祀られた。これは『日本書紀』巻九に、新羅の戦いへ向かう神功皇后の船を守護した底筒男命・中筒男命・表筒男命を祀ったとあることによる。しかし、『伊勢物語』一一七段や『袋草紙』上巻に和歌を詠む住吉の神の姿が描かれ、さらに『拾遺集』『新古今集』などに神詠が採られるなど、平安後期には歌神として崇拝されるようになっていった。

『日本のデジタル文学地図』参照

(<https://literarymaps.nijl.ac.jp!/app/spots>)

- すみのえ(「江」:海辺を意識した言葉)→すみよし
- 海の神から、和歌の神へ→和歌が栄える国＝治世が正しい→国土を守る神。
- 難波津を望み淡路島まで見渡せる名所。和歌に詠みこまれる。

住吉踊の歌詞

住吉様のイヤホ

あらおもしろの神踊 天長く地久しく 天下泰平
国土安全 五穀成就 民栄え 治まる御代の例と
てかねてぞ植えし住吉の 岸の姫松めでたさよ

住吉様のイヤホ

一の本社は底筒男の尊様 二のお宮様は中筒男の
尊様 三のお宮は表筒男の尊様 四のお宮はこ
れがいゆる神宮皇后様 夫を合せて 住吉四社
明神と称え奉るこれかねの天のえろ ほう おこん
ご おせんどい

住吉様のイヤホ

四社の御前の神かぐら いつも変わらぬ鈴の音ヤ
レ住吉さまの 岸の姫松めでたさよ

エーエー住の江の神の心をまもるなら 家内安全
商売繁栄 家の内御祈禱 チリリヤタリ、かささ
ぎの橋 どんどん川やさぎの橋 そうれ橋やかく
の鳥居や玉出の岸や、ソレ住吉様の 岸の姫松めで
たさよ

住吉様のイヤホ

↓歌詞としては 住吉の神を称え 天下泰平
国土安全 五穀豊穰 家内安全 商売繁盛を祈る
神事芸能

「イヤホ」は「陰陽穂栄」の転化といわれる

住吉踊の本歌

五穀成就民衆へ、治まる御代のしるしと
て、予てぞ植えし住吉の岸の姫松めでた
さよ。

四社の御前の神かぐら、いつもかはら
ぬ鈴の音、ヤレ住吉サマの岸の姫松めで
たさよ。

↓詳細未詳。古い時代の歌詞？歌詞は、
数パターンあったらしい。

○高橋金芳『乞胸と江戸の大道芸』

「しかもこの歌は昔の音頭取りがなるべく
わからぬように唄うもので、古い時代には
「四社の御前の神かぐら」も「スサーマ
エーカムカグラ」という具合で、解らぬな
がらよい声で唄ったものであるという。

↓芸態 歌詞は何度か変化しているか。

○参考『人倫訓蒙図彙』（元禄三年 一六九

「住吉のほとりから出る下品ものもな
り。：。あとのとめは「住吉様の岸の姫松
めでたさよ、千歳楽 万歳楽」といふゆえに
住吉踊と云也。」

↓歌詞が違ふ。

↓本家「住吉踊」ではない芸能の歌詞？

住吉踊とはどのような芸能なのか。

現在から資料類(江戸時代前期以降)に変遷はあるが、赤い垂れのついた傘をもち、踊り手は赤い前だれ(顔を隠す?)はほぼ共通。



踊念仏→風流踊

- 傘は出現した霊（疫神）の依り代。
- 笠は大てい花笠になって縁に垂布か紙手（しで）をたらして顔をかくす。
- 覆面、貌を隠す。→精霊に扮して踊りながれ、霊を村の外に送り出すため？

（五来重「風流の踊」）

住吉踊
覆面で
貌を
かくせと
傘鉾は
頭れ出し
住吉

おどり



『絵本御伽品鏡』より 住吉踊

『大衆芸能資料集成』第三巻より転載。→これは江戸に伝わった変形「住吉踊」か。

「芸能化した念仏は御霊の鎮魂または疫神の鎮送の咒述における咒文(マジカルスペル)であるから、御霊や疫神をあつめ鎮める花傘を必要とする。すなわち鎮魂の咒具の風流化したものである。念仏踊はこの下で霊を鎮める咒的足踏(マジカルステップ)で、これがやがて風流踊になる。風流傘は傘鉾もしくは「傘ぼうろく」とよばれ、いま住吉踊や嘉喜踊(岐阜県郡上郡奥明方村寒水)、滝宮念仏踊(讃岐綾歌郡綾南町)、盆祭祝儀踊(伊豆新島)、三日市おんない(伊勢鈴鹿市三日市町)などに代表的なものが見られる。京都の祇園御霊会にも傘鉾があり、「はやし物」とよばれたのは念仏拍物(ねんぶつはやしもの)の傘鉾だったのである。」

(五来重「風流の踊」)

補足：咒的足踏について

舞：旋回動作。足が地から離れない。「まはる」の名詞化した語。グルグル走りまわる、歩きまわる。→祭りの場で神がかりするため。興奮が高まって、人か神かの恍惚の境地に達する。

踊：跳躍動作。足が地から離れる。＊住吉踊

→舞と踊の違いに言及したのは、折口信夫「舞ひと踊りと」『芸能復興』創刊号）が最初？

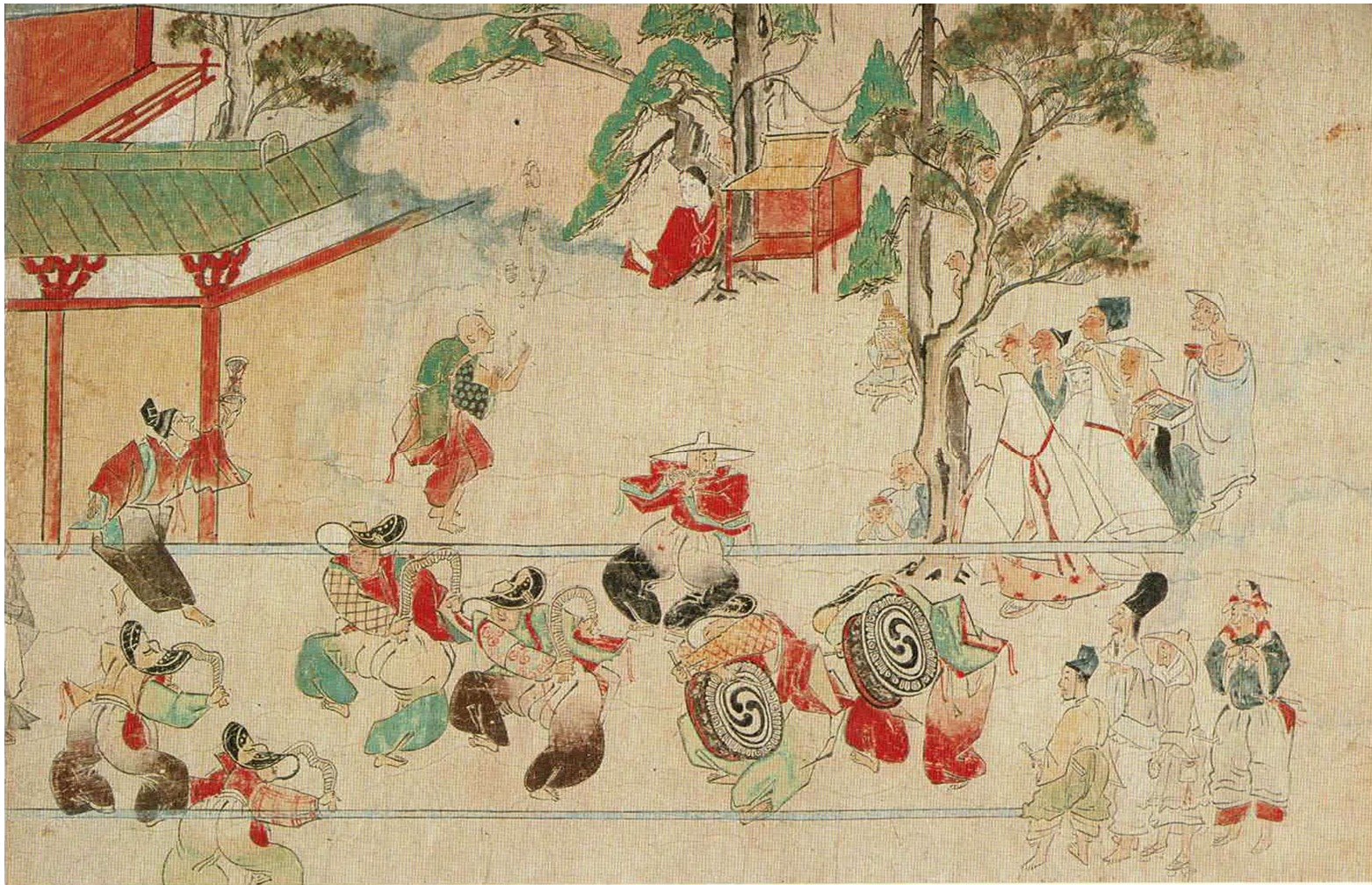
足拍子：陰陽師の悪霊退散のまじない「反閤（へんばい）」の系統。大地を踏みつけ、地下に跳梁する悪霊をおさえ、代わりに正気に呼び戻そうとする呪術。

→住吉踊は、垂れ付の傘、音頭取りが拍子をとる。顔を隠した踊り手。跳躍するステップ。

→風流踊系統と一致する特徴を持つ。

田植え神事に関連する芸能 での足拍子1

『浦島明神絵巻』(平凡社別冊太陽)『能』より転載



▲祭礼田楽図 笛・鼓・編木の伴奏で刀玉風の芸を演じる田楽。寺社の祭礼が田楽や猿楽の主要な活躍の場であった。『浦島明神縁起絵巻』

田植え神事に関連する芸能 での足拍子2



▶田植図 囃す人が翁面・三番叟面を着た猿楽風の囃子田（囃子物を伴う田植）で、似た風習が今も広島県などに見られる。
『月次風俗図屏風』

『月次風俗図屏風』（平凡社別冊太陽）
能より転載

風流の歴史

（『演劇百科事典』「風流より抜粋」

・ 風流はもともとは仮装の意味も。

・ 『洛陽田楽記』『古事談』にみえる永長元年一〇九六の大田楽。花田植の風流や仮装。

・ 疫神祭・ 疫神をやや花やかな神座につかせて 祭の後 やがて境の外に退散させる。

・ 崇神天皇の御代における疫神祓『記紀』や、貞観五年八六三五月二〇日の神泉苑における御霊会『三代実録』などは 宮廷で行った紙送りの一様式であつたが、民間にも行われた疫神しずめの祭の一つに、やすらい花などがあつた。疫神の神座である風流傘を中心に、人々は鼓笛を鳴らし、歌をうたつて狂歡のさまをなした。後には神座を人々が背負い、自らに疫神を招きおろして、狂いわたつて後神送りをするような形にもなつた。

↓住吉踊に似ている？

●「住吉太神宮諸神事之次第記録」
(鎌倉時代後期)

七月七日 虫拂の儀

●二洲橋生「住吉かつぽれ」(『文芸倶楽部』九卷四号)

住吉神社に**蟲追祭**と称する神事があつて毎年一回づゝ此儀式を挙行したが、其当日は十数名の若者が白無垢の衣服に黒の腰衣を着けて神事の舞の舞樂を奏するのである。然して其式を終ると其内の一人が、彼のやあとこせいが用ゑるやうな大きな傘を持ち、片手に反古張の**澁団扇**も持つて、其れで傘の柄を叩いて拍子を取りながら「住吉様の岸の姫松御日出度や」と唄ふと他の者を一同是に合せて右の神事のち蟲追踊を踊つて八方を廻り、そして若干の米塩の料を得た。

↓ 渋川虫よけ

住吉踊の伝播



- 
- 古くから住吉神社の神事として踊られていた可能性はあるが、具体的に「住吉踊」を記す資料は、江戸時代からがほとんど。

しかも、『人倫訓蒙図彙』(元禄三年・一六九〇)「住吉のほとりから出る下品ものもなり」のように、下等なものとして記述するものもありやや様子が異なる。

住吉踊 平凡社『演劇百科大辞典』

民俗芸能 大阪市住吉区住吉神社に伝わる踊り。白木綿の単衣着に、黒木綿 もとは茜染の腰衣 白の手甲 脚絆 甲掛けをつけ、わらじをはいた者が、ふちに木綿幕を垂らした菅笠をかぶり、一人の音頭取りが長柄の大傘を左手に、右手に割竹を持って、竹で柄を打ちつつ踊り、歌をうたひ、四人の踊子が団扇を手にして大傘のまわりを跳躍して踊る。踊り歌は「住吉様のイヤホ、あら面白の神踊り、天長く地久しく、天下泰平国土安全五穀成就民栄え、治まる御代のためしとて、かねてぞ植えし住吉の、岸の姫松目出度さよ」など。現行の踊りは、明治に絶えたのを大正一〇年 一九二〇に復興させたもので、**以前は願人坊主の団体が、京大阪や江戸にこの踊りを持ち歩いた。**

古くは住吉神社神宮寺の社僧が住吉代参の祈祷の目的で各地を巡歴して踊ったものと伝える。田楽や念仏踊の要素をもつもので、**江戸音曲のかわばれや、関東の万作踊などに影響を与えた。**（三隅治雄）

混乱する「住吉踊」の伝承

中山太郎「住吉踊考」附 願人坊主考二
（『旅と伝統 昭和3年』）

いつも頭だつた男が『伊勢の： 銭掛松は』
云々と謡ふのでその文句を聞き覚え母に尋ね
たところが『あの唄は 伊勢の豊久の銭掛松
は松は枯れても名は残る と云ふのであつ
て住吉踊と云うのだ』と語られた上に、覚え
ない母の耳学問の銭掛松の故事まで聴かされ
たものである。

その後 私は東京 出てたが 消閑やら娯楽
やらで浅草公園 遊びに行くと 故郷で見聞
きした踊や唄を梅坊主一座が遣り 然もそれ
を「住吉踊」とは云はずに「かつぽれ」とばかり
呼んでゐる。そこで腑に落ちぬので 或時 故
人となつた幸堂得知翁に伺ふと『住吉踊と
云うのは 昔 関西から流行して来たのだが
それが江戸にゐた願人坊主の手に移つてから
かつぽれとなつてしまひ いか住吉踊の名が
忘れられてしまつたのである』と云うやうな
意味の事を話された。それから後に私も斯う
した事に興味を持つやうになり 本を讀んだ
り人に聴いたりしてゐるうちに、私が幼年の
頃に見たものは母が云うた住吉踊では無く
して、既に江戸の願人坊主によつて工夫され
た「かつぽれ」であつて 唄は伊勢音頭であつ
たことなどが知れた。

主人坊願

『日本大百科全書ニッポニカ』

僧形の大道芸人。依頼者にかわて代参、代待だいまち、代垢離だいごりをする代願人。

もと江戸 東叡山寛永寺の支配下で、僧侶の欠員を待って僧籍に入ること願っていた者たちをさすという説もある。

江戸時代には藤沢派 羽黒派と鞍馬派の2派があり江戸の市街地で集団生活をしていた。

元禄(1688～1704)のころには馬喰町や橋本町に住み 天保(1830～1844)のころには芝新網町 下谷山崎町 四谷天竜寺門前のあたりに住んでいた。

判じ物 御日御祈禱(おひよりごきとう)、和尚今日

(おしようこんにち、庚申(こうしん)の代待 半田行人

(はんだぎょうにん、金毘羅行人(こんびらぎょうにん、

すたすた坊主 まかしよ、わいわい天王 おぼくれ坊主

(ちよぼくれ ちよんがね、阿呆陀羅経(あぼだらきよ

う、住吉踊(すみよしおどり)などの異称があるのは

彼らの大道芸が多種多様であったことを物語る。滑

稽(こうけい)、諧謔(かいぎやく)をなし、卑俗な芸

を演じたため民衆に親しまれた。門付(かどづけ

の祭文(さいもん)も語り 後の浪花節(なにわぶ

しやかっぱれに影響を与え、歌舞伎(かぶき)にもそ

の風俗芸能が取り入れられた。「関山和夫」

絵画資料でみる願人の芸1



『人倫訓蒙図彙』より 庚申代待



『風俗画報』第48号 より高野行人

『只今御笑草』(瀬川如阜)より 高野行人

『大衆芸能資料集成』第三巻より転載。

絵画資料でみる願人の姿



『江戸商売図絵』（三谷一馬）より お天気御祈禱

お天気御祈禱



考へ物

『江戸商売図絵』（三谷一馬）より 考へ物



和尚今日ハ

『江戸商売図絵』（三谷一馬）より 和尚今日ハ

舞踊「うかれ坊主」



『日本舞踊全集』より転載、常磐津「願主坊主」花柳三之助

文化頃に江戸で願人坊主が 住吉踊りを流行らせた？

これまで言われていた説の確認

○本居内遠『賤民考』（弘化四年 1847 年成立）

近世願人坊主といひて、僧形にて妻子ある乞食あり。中略、芸能あるいは舞踊、弦鼓などし。住吉踊りなどいふことをもせり。へ中略、是は江戸より興りて、今や諸国をもめぐり歩くなり。

*確かに住吉踊を踊っているが、様々な芸能をしていた僧形の大道芸能者

○齊藤月岑『百戲述略 第二集 明治十一年成立 新燕石十種本』

住吉踊は文化年中相始播州の住吉踊を学び、白き衣類腰衣をかけ、団扇を持候者、両三人中略、「住吉様の岸の姫松おめでたや」とうたひ、市中を歩き申候。是も橋本町の願人坊主に可有之候云々。

*住吉は播州ではなく、摂州。勘違い？

○『続飛鳥山』

住吉踊 文政の初めなるべし、面白からねど人々よろこぶ。

住吉踊と願人の関係の始まりは

文化 文政期 1804～1830 の江戸。

↓この説には異論を唱える人も多い。

人形浄瑠璃『妹背山女庭訓』（明和8年1771年1月28日大坂竹本座初演 第三段「定高館の場」

大化の改新を題材とし、蘇我入鹿の悪業に、藤原不比等が立ち向かう時代物 第三段は「定高館の場」は、奈良の都の内裏を守護する太宰の館で、入鹿公のお祝いのために、諸芸人、諸君、芸人に受領、諸国の長官名を名誉称号として授ける、する場面。そこに願人坊主が登場し、

様々な芸を披露するなかで住吉踊を披露する（『日本古典文学全集 77 浄瑠璃集 三七七頁頭注参照』

弥藤次「コリヤ／＼汝、所化なれば上人和尚になりたいた望みか。

願人坊主「イヤ／＼。愚僧は願人坊主、寺号をお許し下さりませ。

弥藤次「ム、願人とはなんの宗旨。

願人坊主「されば八宗九宗をもれ、二季の彼岸は鉦太鼓で町々を、六斎念仏、お目にかけうと風呂敷より。取り出し始める太鼓の拍子。やあん楊柳子。楊柳子

（中略

庚申には銅鑼うつて。庚申の代待ち。さて傘(からかさ)に、赤前垂れを腰に巻き住吉踊。四社のお前で扇を拾うた。扇めでたや末繁昌。サ住吉様の岸の姫松めでたさよ。白かん金延べてソレ襷に

（中略）

弥藤次「これはしんどい宗旨じやな。向後は其方を。暁山西方寺と寺号をお赦しなさるゝぞ。

願人坊主ハア有難し、忝いと…

↓文化文政以前に、大坂やその周辺にも存在し、様々な芸を披露していた。

↓願人が撮取した様々な芸の一つが「住吉詣」だったか。

・後藤捷一氏の諸説 高橋金芳『乞
胸と江戸の大道芸』

… 中世に至り別当寺たる神宮寺
から毎年踊りを奉納した。しかも
神宮寺の社僧が住吉大社代参の供
物を集めるため諸国を巡歴し、そ
の際踊りを行ったのでこれを住吉
踊と称せられるに至った。しかも天
下泰平 五穀豊穰 庶民繁栄を祈願
する僧形 僧服であったので 願人
坊がこの踊りを真似るに至ったので
あろうという。

加えて神宮寺の衰微により 御田
植神社に奉仕する力を失い、専ら
大坂周辺に住む願人坊がこれを踊
り物乞いを行った。このため次第に
あれは乞食の踊るものとされ、一
般には行われなくなつたという。

・段上達雄「傘鉾と芸能——傘と踊り」

「神宮寺の勧進僧たちが 五穀豊穡
や家内安全などの唄を歌いながら
「住吉舞」という芸能を演じて 住吉
大社の寄付を集めていた。それが
次第に京大阪の願人坊主たちが物
乞いのために真似るようになり次
第に門付け芸として広まっていた
というのである」

「勧進僧たちは住吉大社の御田植
神事の時には住吉神宮寺に戻って住
吉踊りを演じ 旧暦6月30日の南
祭まで滞在して再び廻国の旅に出て
いたという。」

↓その後 江戸に住む願人たちも
取り入れたか。

江戸で願人坊主の「住吉踊」流行

天保の改革で取り締まりの対象になる。

・天保一三年一八四二 急増する都市窮民を減らすため人別改め。

十一月二五日 寺社奉行阿部伊勢守正弘から老中水野忠邦の報告

「市中の人別のうち 鞍馬願人の不作法については 諸寺院にとりしまりを命ずる必要があります。願人は 最近半田稻荷勧進 住吉踊りなど 僧侶にもあるまじき所業によつて 銭をもらいうけているようにと聞いています。そこで 頭の者をただして 作法を書きださせ 市中 お触れを出す時ついでに命令すれば 全体の風紀も整い、法がきびしくなれば それを窮屈に思つて 自然と願人の数も減るでしょう。」

・住吉踊の禁止

（中尾健次「江戸の大道芸人」より）

・弘化年間一八四五～四八、今度は「豊年踊り」として復活。

・弘化四年一八四七七月 四人組の芸人が「住吉踊」を踊った疑いで取り調べを受ける。

・元「願人」が「乞胸」の鑑札をもらい、芸能活動。

「しかも「住吉踊り」なら規制できるわけですが彼らが踊っているのはあくまでも「豊年踊り」なのです。」

・さらに「深川かつぽね」となり 江戸の風俗として定着

（中尾健次「江戸の大道芸人より」

天保の改革で規制された願人による「住吉踊」を隠れ蓑として 名前を変えて継続

・幕末から明治にかけては「かつぽね」として流行

・「かつぽね」の名手「豊年斎梅坊主」。

歌舞伎でも振付を担当したらしい。

幕末～明治の願人の芸



『風俗画報』第7号より 願人

『大衆芸能資料集成』第三卷より転載。



『絵本風俗往来』（菊池貴一郎）より 住吉踊

・常磐津舞踊「かつぽれ

伊勢音頭「伊勢はナア、津でも、津でも、尾張名古屋はヤンレ、城でも」「ヤアト」セ

住吉踊「姉さん本所かえ ↓ **だいぶ**歌詞が違ふ。

深川「猪牙で行くのは深川通い、あがる段梯子アレワイサノセ

かつぽれ

尻取浄瑠璃

滑稽な茶番

豊年踊の総踊り

（『日本舞踊ンドブツ』三省堂より）

・かつぽれ」歌舞伎舞踊 大道芸のかつぽれを取り込んだ舞踊には「栄華の夢全盛遊（文政10年、「娯浮世機関 おもしろやうきよからくり」（明治8年、「初霞空住吉 はつがすみそらもすみよし」（明治19年 などがある。 現行のは最後のもので新富座初演 河竹黙阿弥作詞 曲は常磐津

官員甘井官蔵が芸者らを連れて浅草公園 遊びにきて**活惚** **かつぽれ** に芸づくりをやらせるのが大筋で主唄の「かつぽれ 二上り」ほか「住吉踊 二上り」「豊年踊 二上り」「深川 本調子」「姐さん などの曲目を踊り なかに掛合噺がまじえられる

（『演劇百科大辞典（平凡社）

かっぽれの歌詞

【寄席芸 住吉踊り 古今亭志ん朝ほか（1994年8月）

https://www.youtube.com/watch?v=rj_O-rDEXWZU

かっぽれかっぽれ甘茶でかっぽれ

塩茶でかっぽれ ヨーオ オイトサ ヨイナー

沖の暗いのに 白帆が ヨーエアーエ見ゆる あれは紀

伊の国 ヤレノコレワイサ アヨイトサッサッサ

サーアー蜜柑船 アー蜜柑船

船工蜜柑船 ヤーエアーエ

あれは紀伊の国 ヤレノコレワイノサ アアアアー蜜柑船

ヨーオ オイトサ

ここはどこよと 船頭衆にヨエアーエ問えば

ここは屋島で ヤレノコレワイサ

（全集日本吹込み事始11 諸芸 詩吟編より豊年斎梅坊
主の録音した「かっぽれの詞章

↓《奴さん》など小唄 端唄等にも歌われる芸能の詰め
合わせ。

↓原型の住吉踊からは 遠く離れた芸

にも関わらず あれが「住吉踊であるという伝承のみ
残り「かっぽれ」住吉踊という言説も

近代以降の伝承

●段上達雄「傘鉾と芸能——傘と踊り」

「明治4年1871、廃仏毀釈で住吉神宮寺が廃されたことを契機に、住吉踊りは次第に衰微して明治20年1887以降大阪分市内で住吉踊りが見られなくなつた。しかし、地元の伊勢神宮参拝団である楽正会が、宴会芸として住吉踊りを伝えており大正11年1922 3月に貞明皇后が住吉大社に参拝された時に住吉踊を復活させ、同年5月の御田植神事で復興を果たした。現在は幼稚園児や小学校6年生までの女子児童などによつて踊られている。子どもたちに踊らせるようになったのは、昭和3年1928からだという。この住吉踊の踊り手は住吉踊保存後援会が募集している。」

まとめ

- 豊作を祈る(虫よけの)住吉神社の神事芸能
疫神の依り代である傘。垂れ。大地を踏みしめるステップ。
- 神宮寺の僧が踊る→願人坊主が真似て廻国？
- 江戸で願人による住吉踊の流行
- 天保の改革による取り締まりにより、違う踊りを取り入れる。
住吉踊と認識される。
- ・近代になって大阪で復興。

願人によって伝えられた「住吉踊」は、水源は同じだが、だいぶ大きく違う方向に向かい、大きな別の川を作った。

住吉の包容力

参考文献

- 中山太郎「住吉踊考一附、願人坊主考一」(『旅と伝統』)
- 五来重「風流の踊」(日本の古典芸能8『舞踊』平凡社、1970年)
- 高柳金芳『乞胸と江戸の大道芸』(柏書房、1981年)
- 小沢昭一・高橋秀雄『大衆芸能資料集成』第三卷(三一書房、1982年)
- 中尾健次『江戸の大道芸人 都市下層民の世界』(ちくま書房、2016年、初版は三一書房、
- 段上達雄「傘鉾と芸能1―傘と踊り」(『別府大学大学院紀要』22、2020年3月)